魂には、受動的な部分とより高度な部分に分けられる

魂が劣悪な状態というのは、魂にどのような変化があるのかあるいはないのかという問題

1 「感覚はパテー(受動)ではなくて、パテーマタ(受動の状態)をめぐってのエネルゲイア(活動)であり、クリシス(判断)である。なぜなら、受動がたとえばこれしかじかの肉体というような魂以外のものの領域にあるのに対して、判断は受動ではなくて

——もしそうでなければ、さらに別の判断がなければならなず、次から次へと絶えず別の判断を必要とすることになって、無限に遡行しなければならなくなるであろう——

魂の領域にあるからである」と、われわれは主張しているのである

すなわち、「判断は、それが判断である限り、判断の対象に属するものを何も持っていないのかどうか」という問題がそれである

が、しかし、この主張にも、少なからぬ難点が含まれていたのである

だが、人がそのような難点を詩的するとしても、なおわれわれは、その「印影」と呼ばれているものについても

つまり、もし判断が判断対象の印影を持っているとすれば、その判断は作用を受けたことになるわけである

「その有様は(ストア派の)理解しているものとはまったく別で、直知の活動のばあいに見られるものに似ているのであり、その直知の活動は、何ら作用を受けずに知ることのできる活動である」と主張することができるのである

すなわち、一般的に言ってわれわれの議論の意図は、「魂は、物体が熱せられて熱くなったり、冷やされて冷たくなったりするような、そのような変化や変容を受けることはない」ということを示すにあるのである

さらにわれわれは、「魂の受動的な部分」と言われているものにも注目し、「その部分も変容を受けることはない」ということを認めるべきであるのか、それとも、「その部分だけは影響を受ける」ということに同意すべきであるのか考察していかねばならない

しかし、この問題は後にまわすことにして、今は、「魂のより高度の部分」をめぐる諸問題を取り上げて考察していかねばならない

すなわち——魂の受動的な部分よりも高度の部分や、感覚作用よりも高度の部分、そして一般的に魂の何らかの部分が、その魂のなかに悪徳とか偽りの思いなしとか愚かさなどが生じるばあいに、どうして変容を受けないでいられるのだろうか

それに、魂が楽しんだり苦しんだり、怒ったり恨んだり、妬んだり欲したりするばあいには、つまり一般的に言って、決して平静を保っているのではなくて、ことある毎に刺激され、変わるばあいには、その魂は自分に合うものを好み、合わないものを嫌っている(と思われるが、どのようなのだろうか、という問題がそれである)

むろん、もし魂が物体で、大きさを持っているのであれば、何であれ「魂に生じる」と言われていることが生じたばあいに、その魂が影響を受けず、変容をこうむることはないということを示すのは容易ではない

いや、むしろ、まったく不可能なことであろう。だが、もし魂が大きさのない真実在で、魂には不滅性をもなわっていなければならないのであれば、魂に右に述べたような種々の情念を認めて、知らず知らずのうちに「魂は滅びる」などという事を認めるようなことにならないように気を付けねばならない

理性としてのロゴスではなく、形成原理としてのロゴス

いや、むしろわれわれは、ロゴスのないロゴスが、そして情念のない情念が生じると考えるべきだろう

それに、魂のウーシア(本質)が数であれ、あるいはわれわれの言うようにロゴスであれ、数やロゴスに、いったいどのようにして情念が生じるのであろうか

— なお、肉体から、その対応関係にしたがって移されたこれらのことばは、それぞれが相対立する意味に解されるべきであり、したがって、「魂はロゴスを持っているけれども持っておらず、影響を受けるけれども影響を受けない」ことになるのである

2 それで、まずはじめに、悪徳と徳について、「(魂に)悪徳がそなわっていると言われる時、何が生じるのか」を説明していく必要がある

— だが、どうしてそのようなことになるのか考察を進めていかなければならない

なぜなら、われわれは「魂のなかに或る劣悪なものが宿っている」と言い、「その劣悪なものを取り除いて徳を据え、魂を秩序あるものとし、以前の醜さにかわって美しさを作り込むようにしなければならない」と言っているからである

魂が劣悪な状態とは諸部分が不調和であること

ではほたして、「徳は調和であり、悪徳は不調和である」と言えば、昔の人びととの見解をのべていることになって、そのロゴス(説)がわれわれの探求を正しく導くうえで、少なからぬ役割をはたすことになるのであろうか

このようにいうのも、もし魂の諸部分がその本性にしたがって互いに調和を保っているばあいに徳が成立し、調和を保っていないばあいに悪徳が成立するとすれば、魂の諸部分に外から導き入れられたものや他の源から生じたものは、何もないことになるからである

しかしながら、魂のそれぞれの部分は、これこれしかじかのものとして調和に達しうるのであるし、これこれしかじかのものでありながら不調和の状態になるということはありえないのである

魂に、それぞれの役割を果たす部分があって調和している

それはたとえてみれば、合唱舞踊団の者たちが、たとえそれぞれの役割は同じでなくても、舞いながら互いに声を合わせて歌ったり、他の者たちが歌っていない時にあるひとりの団員だけが歌ったり、それぞれの団員がそれぞれの歌い方で歌ったりしているのに

——というのは、単に皆が声を合わせて歌うだけでなくて、それぞれが自分に割り当てられたパートを自分に適した音楽で美しく歌いながら合唱しなければならないからであるが——

似ていると言えるであろう

したがって、あの魂のばあいも、それぞれの部分が自分にふさわしい役割をはたす時に調和が成立することになる

だから、その調和以前に、それとは別に魂のそれぞれの部分の徳がなければならないことになるし、また相互の不調和以前に、それぞれの部分の悪徳がなければならないことになるのである

それでは、現に何がある時に、魂のそれぞれの部分は劣悪なものとなるのだろうか

悪徳がある時にである

では逆に、善くなるのは?

徳がある時にである

しかし、もし人が、「魂の理知的な部分の悪徳は無知である」と言い、しかも否定的な意味で「無知」と言っているばあいには、おそらくその人は、「現に或るものがあるということによって、その部分が劣悪なものとなる」とは言っていないことになるであろう

しかし、その理知的な部分に偽りの思いなしも内在しているばあいには

——まことにこの偽りの思いなしこそ、悪徳をつくりだすことの最たるものであるが——

人は「その部分に或るものが生じる」ということや、「それが生じることによって、その部分が以前とは異なった状態になる」ということをどのようにして否定するのであろうか

魂に、それぞれの役割を果たす部分とさらに複数の司る部分があり、さらに司る部分はその都度、異なる状態をもつ

なお、魂の気概を司る部分は、臆病かぜに吹かれている時と勇敢な時とでは、それぞれ異なった状態にあるのではなかろうか

それに、欲望を司る部分は、放埒な時と節制を保っている時とでは、それぞれ異なった状態にあるのではなかろうか

われわれは、次のように答えるであろう。すなわち、「魂のそれぞれの部分が徳をそなえている時には、それは自らのウーシア(本性)にしたがって活動しているのであって、そのばあい、その本性によって、ロゴスに耳を傾けているのである」と

ロゴスは増減することなく魂の諸部分に次々に伝えられる

そして、魂の思惟する部分はヌースからロゴスを受け取り、他の諸部分は思惟する部分からロゴスを受け取るのである

そして、おそらく、ロゴスを「聞く」ということは「見る」ということに似ているのであって、人は自らのなかに形姿を受け取ることによって見るのではなく、見ている時には<現に見ているもの>となり、<現実態においてあるもの>となっているのである

形姿(なりかたち)とは何か?

つまり、視覚は可能態においてある時も現実態においてある時も、その本質においては同じなのであって、その現実の活動は変容ではなく、自らの持つものに接近すると同時にこれを知る活動となり、何の影響も受けずにこれを知るのである

魂の思惟する部分も、知性に対してこれと同じ関係にあり、かつこれと同じようにして見るのであって

——魂のト・ノエイン(思惟すること)の可能な力とは、これなのである——

その部分は自己自身のなかに対象の刻印が生ずることによって見るのではなく、見たものを持ちかつ持たぬのである

すなわち、「持つ」というのは、知識を持つからであり、「持たぬ」というのは、蜜蝋のなかの印形のように、見られるものから或るものがでてきて、自分のなかに貯えられるわけではないからである

では、見る度、思惟する度にその部分は変容するのであろうか?

見ることも、思惟することも、その部分が何かを蓄えるのではなくて、その部分が変容する

なお、記憶についても同じで、「記憶がある」のは、「或るものが魂のなかに貯えられているからではなく、魂が力を目覚めさせた結果、持っていないものを持つことになるからである」と言われたことを思い出してもらいたい(IV 7,6,43)

では、どうだろうか。魂は、そのようにして記憶する前と、後すなわち記憶している時とでは、異なった状態にあるのではなかろうか

もしよければ、異なった状態にあるとしておこう

そうでなければ、少なくともその魂は変容を受けてはいないのである

ただし、もし人が可能性としての力から現実性としての活動への移行を「変容」と呼ぶのであれば、のことである

これを言うために、これまでの議論があった

すなわち、その魂に付け加えられたものは何もないのであって、その魂は自らの本性にしたがって、記憶という働きを現に活動させているものとなっているにすぎないのである

つまり、一般的に言って、素材のないものの活動は、変容を受けずに行われるのである

もし、そうでなければ、それは滅亡しただろう

滅ぶとは形相の素材からの分離であるから、素材のないものが滅ぶことはない

しかし、むろん、「素材のないものが滅ぶ」などということは、とんでもないことである

しかし、もし素材のないものであるにもかかわらず、作用を受けうるのが筋であるとすれば、そのものはもとのままにとどまっていることの根拠を失ってしまうだろう

それはいくら活動しても、もとのままにとどまっているのであって、「活動しているものが作用を受ける」などということは、素材を伴っているものでの出来事なのである

だが、魂の気概を司る部分は、どうして臆病になるのであろうか

それはたとえてみれば、視覚の能力が現に活動している時に作用を受けるのは眼であるのに似ているのであって、<思いなし>というのはばあいのホラマタ(視覚像)に相当するのである

それにまた、どうして勇敢にもなるのであろうか

魂の気概を司る部分が臆病になるのは、ロゴスを見ていないからであるか、ロゴスが劣悪な情態にある時に、そのロゴスを見ているからであるか、

あるいは肉体上の武器が欠けていたり弱くなっているばあいのように、その道具に欠陥があるからであるか、活動を妨げられているからであるか、それとも刺激されるようなことはあってても、活動へかき立てられることはないからであるか、

いずれかによるのであって、もしその反対であれば、勇敢になるのである

そして、これらすべてのばあいに、魂にはいかなる変容もなければ、影響もないのである

他方、魂の欲望を司る部分がそれだけで独自に活動するばあいには、放埒と言われる状態を生ぜしめることになる

なぜなら、そのばあいには、欲望を司る部分が自分だけですべてを行い、他の部分はそこに居合わせていないからであって、もし他の部分がそこに居合わせていれば、それぞれの立場で欲望を司る部分を支配し、道を示したことであろう

しかし、この部分の悪徳と言われているものは、一般に肉体の悪しき状態でもあるのであって、徳はそれと反対の状態なのであろう

したがって、そのいずれのばあいでも、魂に付け加えられるものは何もないのである

3 だが、魂は或るものを自分にふさわしいものとして受け入れ、別の或るものを自分には縁のないものとして忌避する傾向にあるが、これはどうしてなのであろうか

それに、苦しみも怒りも楽しみも、そしてさらには欲望も恐怖も、魂のなかにあって動いているのに、どうして変化や情態でないことがあろうか

まことに、これらの問題についても、われわれは次のような区別をたてる必要があるであろう

しかし、われわれはその説に同意するとしても、変容を受けるものがいったい何であるかを調べてみなければならない

すなわち、「<われわれ>のなかに諸々の変容が生じ、かつそれらの変容についての強烈な意識がある」のを否定するのは、明らかな事実に反することを言う人のすることである

なぜなら、われわれがそれらの情念を魂との関連で口にする時には、「それらの情念は魂ゆえにあるのであるが、しかし、別の組織(としての肉体)に生ずるものである」と考えなければ、「魂が赤くなったり、逆に青くなったりする」と言うばあいと同じような理解の仕方をしてしまう危険があるからである

たしかに、恥ずかしさは、魂のなかに醜悪なものへの思いなしが生じるばあいに起こるもので、その魂のなかに位置を占めてはいるのである

しかし魂のいわば所有物としての肉体が

——ここで「いわば」という言いまわしをしたのは、ことばによる誤解を避けるためであるが——

魂に従属していて、生命のない物体とはちがうので、動き易い血液の面で変容をこうむったのである

また恐れと称されるものも、たしかにその元は魂のなかにあるのであるが、蒼白化は、血液が内側に引いてしまうことによるのである

さらに快楽については、そのうちの<くつろぎ>に属するもので知覚されるものは、肉体にかかわりがあるけれども、魂にかかわりのあるものは、もはや情念ではないのである

そして苦しみについても同じことが言えるのである

というのは、欲望にかかわる事柄でも、それへの欲望の始まりは魂にあるのであるから、気付かれないものがあるのであって、感覚が知るのはそこから感覚に達したものだけだからである

すなわち、われわれが、「魂は欲求したり、推理したり、思いなしたりしながら動く」と言うばあいでも、それは「魂はそのようなことをすることによって揺れ動いている」という意味ではなく、「それらの動が魂自身から生じている」という意味なのである

つまり、われわれが「生」を「動」として述べるばあいでも、それを魂とは異質なものの動としてのべているのではなくて、魂の各部分の活動として、すなわち魂に変容を与えることのない本性的な生命活動としてのべているのである

そこで、今までの論述を十分に満たすまとめ方をすれば、次のようになるであろう

すなわち、「もしわれわれが、活動や生や欲求が変容ではないことに同意するならば、それにまた記憶も、魂に押された刻印ではなくて、蜜蝋のなかの印影のような表象でもないことにも同意するならば、

『魂は情念とか動とか呼ばれているもののすべてにおいて、いついかなるばあいでも、そのヒュポケイメノン(基体)やウーシア(本性)の同一性を保っている』ことに同意しなければならなくなるであろうし、

また、『徳や悪徳は、黒さと白さや暖かさと冷たさなどが肉体に生ずるような意味で魂に生ずるのではなくて、すでに述べられた仕方で、すなわちその卓越性と劣等生の両面において、あらゆる点でまったく相反しているものとして生ずるのである』ということにも、同意しなければならなくなるであろう」と

4 だが、われわれは、「魂の受動的部分」と言われているものについて、かつこれと同じ仕方で考えをすすめていかねばならない

しかしわれわれは、ふたたびこの部分を取りあげて話をすすめ、まず「魂の受動的部分」とは、いったい何であると言われているのかを理解していくようにしなければならない

むろん、この件については、魂の気概を司る部分や欲望を司る部分の内で生ずる諸情念のすべてについて、そのそれぞれがいかにして生ずるかを説明したところで、ある意味ではすでに述べられているのである

魂の受動的部分について

さて、この部分は一般に、「諸々の情念が生ずるところ」と言われている

だが、それらの情念は、<快楽や苦痛がそれに伴うところのもの>なのである

そして、それらの情念の或るものは、思いなしのうえに成り立っているのであって、たとえば、或る人が「自分は間もなく死ぬだろう」と思い込んで恐怖にとらわれたり、「自分には何か善いことがあるだろう」と考えて愉快になったりするばあいがこれにあたるのであって、

これに対して、別の諸情念は、それ自体でいわば主導的な立場をとり、思いなすこともともとの機能としている魂の部分にアプロアイレートース(無条件に)思いなしを作り出すのである

このばあいには、思いなしが席を占めているところと情念がかき立てられるところとは、それぞれ別なのである

しかし、むろん、その思いなしが魂の思いなす部分にいかなる変容も与えないことは、すでに述べられたことである

ただし、思いなしに基づく恐怖は、上位のものとしての思いなしから発するのだから、それ自体でも<魂の恐れをいだくと言われている部分>にある種の理解のようなものを提供はするのであるが…

では、いったい、何がその「恐れ」をつくるのであろうか

「予期される災いを前にしての、混乱と驚愕が恐れをつくりだす」と彼らは言っている(ストア派の説SVF(III386))

たしかに、表象というものは、

<われわれがこれを思いなしと呼ぶ第一義で来な意味での表象>であろうと、

あるいは<その思いなしに由来するもので、もはや思いなしではなくて、下位の領域のもつ漠然とした思いなしのようなもので、定かではない表象、つまり像を伴わずに——と彼らは言うのであるが——一個別的なものを作るという点で「ピュシス(自然)と呼ばれているものに内在している活動のようなもの>であろうと、ともに魂のなかにあるのである

ともに魂のなかにあるのであって、これはだれの目にも明らかであろう

しかし、それらの表象から生じたものは、肉体の領域での混乱として、すでに感性的なものとなっているのであって、身体が震えたり衝撃を受けたりし、蒼白になったり、口をきくことができなくなったりすることが、これにあたるのである

というのも、事実、そのようなことは、魂の部分には起こりえないからである

もし、そうではなくて、その部分が直接にそのような影響を受けたのであれば、われわれは「その部分は肉体的なものである」と言わなければならなくなるであろうし、また、そのその部分の受けたそれらの影響は、もはや肉体にまで到達しないことになったであろう

なぜなら、そのような影響を肉体に伝達するものがその影響の虜になって我を忘れ、そのためにはもはや伝達者としての働きを行わなくなってしまうからである

しかし、実際には、魂のこの受動的部分は肉体ではなくて、或る種のエイドス(形相)なのである

とはいえ、魂の欲望を司る部分も、栄養を司ったり成長や生殖出産を司ったりする部分も

——この部分が、欲望を起こしたり作用を受けたりする形相の根であり、元であるのだが——

ともに素材内にあることは事実である

しかし、およそ形相たるものには、混乱ないなどの受動はあってはならず、形相やそれ自体で保っているけれども、受動の情態が生じるばあいには、その形相と交わっている素材が、その状態にかかわるのでなければならないのである

なぜなら、形相は現にあることによって動かすからである

というのも、事実、魂の成長を司る部分は、自分が成長しながら他を成長させるのでも、自分が大きくなりながら他を大きくするのでもなく、また一般に、自分のつくりだす動と同種の動きをしながら他を動かすのでもないのであって、

まったく動かされないか、あるいはその動きは別種の動であり、活動であるかのいずれかであるからである

かくして、形相のピュシス(本性)は現実化の活動でなければならず、あたかも音階の調べがそれ自体で弦を奏でるように、(形相も)現にあることによって作るのでなければならないことになる

してみると、魂の受動的部分は、受動の状態の原因者ではあるが

しかし、魂の受動的な部分それ自体は、音階の調べに似て、平静を保ちながらとどまっているのである

——なぜなら、感性的な表象に基づいて、いや、表象なしでも、その部分から動が生じるからである。[もっとも、思いなしが(その動の)最初の始まりであるのかどうか考察されねばならないのであるが]——

あるいは、動の原因者は音楽家に対比され、情念ゆえに衝撃を受けるものは弦との類似関係にある、といえるかもしれない

なぜなら、演奏のばあいでも、作用を受けるのは音階の調べではなくて、弦のほうなのであるから

もっとも、たとえ音楽家が演奏を欲しても、音階の調べがこれをよしとしなければ、弦は動かされることはないのであるが…

5 では、もし魂がまったく外的な影響を受けないとすると、なぜ、われわれは「愛知によって、その魂を外的な影響から自由なものとするように努めなければならない」のであろうか

魂の「受動的」と言われる部分にはいりこんだいわば「パンタスマ(表象)」のごときものが、その結果として情態すなわち混乱をつくりだし、その混乱に予測される災いのエイコーン(像)が結びつけられるのであるから、

哲学的な言論が情態と呼ばれるこの種のおのれを完全に取り除いて、魂のなかに生じさせないように要求したのであって、

それは、「この種のものが生じるようであれば、その魂はまだよい在り方をしているのではないが、生じないようであれば、その情態の原因者としての、魂にかかわるホラーマ(視覚像)が、もはや魂のなかに生じることはないのだから、魂は情態から自由となる」との、理由からである

このことは、たとえてみれば、人が夢のなかに現れるパンタシアー(幻)を取り除こうとして、幻を描いている魂を目覚めさせようとし、「外的な視覚像のようなものは、実は魂の情態なのだ」という意味を含めて、「魂がそれらの情態を作ったのである」と言い聞かせているばあいに似ているといえよう

しかし、もし魂がいかなる汚れも受けていないとすると、「魂の浄化(『パイドン』67c)」にはどんな意味があるのであろうか

「魂を肉体から引き離す」ということは、どんなことなのでろうか

魂の受動的部分の浄化

浄化とは、「魂が自分以外のものに目を向けることをせず、また、どのような思いなしであろうと

——あるいはすでに述べられたように、どのような情態であろうと——

自分に縁のない思いなしを持つこともしないで、純粋に自分だけの状態を保ち、他と交わらず、影像に目を向けることもしなければ、影像から情念を作りあげることもしないこと」である

そこで、もし魂が下位のものから別の上位のものへと向かうとすれば、どうして、その上昇が魂にとっては、浄化やそれに、分離でないことがあろうか

その時の魂は、もはや「肉体のもの」としての肉体のなかにあるのではなくて、濁った不透明なものから離れた光りのようなものとなっているのである

しかし、むろん、濁ったもののなかにある光りでも、その影響を受けることはないのである

それゆえ、魂の受動的な部分の浄化とは、「諸々の不条理な影像から目覚めて、それらを見ないようにすること」であり、分離とは、「下位のものに傾きすぎず、下位のものについての表象を持たぬようにすること」によって可能となるのである

そして、その部分を肉体から引き離すことは、また<それらからその部分が引き離されるところのものども>を取り除くことでもあるのである

なぜなら、その部分は、暴食と多量の不純な肉によって汚濁した気息に座を求めるのではなくて、自らの宿るべきものがほっそりと痩せているばあいには、これを自らの座として安静を得ることになるからである

6 かくして、「全体として形相の領域に配置されている知性的なウーシア(真実在)は、非受動的であるとみなされなければならない」ということが述べられたのである

しかし、素材も、たとえその意味は異なっているとはいえ、やはり非物体的なものの一つであるから、この素材についても、それがどんな性格を持っているのか、

それは(ストア派に)言われているように、受動的なものであって、あらゆる点で変容を受けるものであるのか、

それともこの素材も非受動的であると考えるべきであるのか、そして(後者であれば)どのような意味で非受動的であるのかということが考察されなければならない

だが、右の問題の解決を求めて論述の発端を切り、素材の本性について、それがどのようなものであるかを論ずるためには、まず、「有るものの本来の姿や有り方や有るの意味は、多くの人びとが考えているようなものではない」ということを理解する必要がある

なぜなら、有るものは、それが真に「有るもの」と呼べるものでもあるなら、ほんとうに有るものであるからである

だが、ほんとうに有るものは、あらゆる点で完全に有るものであり、あらゆる点で完全に有るものは、いかなる点においても有ることを欠いていないものなのである

もしまことに、右の見解にまちがいがないとするならば、有るものは<生>のなかに、しかも<完全なる生>のなかにあるのでなければならないことになる

そして、それは完全に有るのであるから、自己の保全や有のためには何も必要としないのであって、他の「有る」と思われているものの、「有る」と思われていることの原因でもあるのである

つまり、有るものがこれを欠くならば、それは有るものであるよりも、むしろ有らぬものであることになるわけである

してみると、それはまた<規定されたもの>でもあり、<限定されたもの>でもあるのであって、その力の及ばないものは何もなく、その力は量的に限りのあるものではないことになる

ということは、つまり、ほんとうに有るものは<知性>であり<全きプロネーシス(知)>でなければならない、ということなのである

もし、そうでなければ、それは<欠けたところのあるもの>となるからである

それゆえにまた、それは恒常なものであり、同一の状態を保っているものでもあるのであって、いかなるものも受け入れず、またいかなるものもそのなかにはいっていくことはないのである

有るものとは

すなわち、もしそれが或るものを受けいれるとすれば、それは自分以外のものを受けいれることになる

だが、その受けいれられるものは、有らぬものなのである

しかし、それは、全き意味で有るものでなければならないのである

したがって、それは自己自身に基づいてすべてを所持しているものとして、<有>へとやってきたのでなければならないことになる

つまりそれは、すべてが渾然一体をなしているものであり、一つでありながらすべてでもあるものなのである

もしまことに、「有るもの」をこのように定義づけるならば

——だが、このように定義づけなければならないのである

そうでないと、有るものから知性が生じることも生命が生じることもないことになるであろうし、知性や生命は、有るものに外から付け加えられたもので、

[有らぬものから生じたものとして]有るものではないことになるであろう

そして有るものは<生命のあるもの>でも<知性のあるもの>でもないけれども、真なる意味では有るものでないものは、生命や知性を持っていることになるであろう

そしてその理由として、「生命や知性は劣ったもののなかに、つまり、有るものよりも下位のもののなかにあるのでなければならない」ということがあげられることになるであろう

というのも、有るものより先にあるものは、生命や知性を有るものに対して供給するものではあるが、それ自体は生命や知性を必要としないものであるからである——

そこで、もし「有るもの」がこのような定義に該当するものであれば、それは或る種の物体でもなければ物体の基体でもなく、物体にとっての「有る」は、「有らぬものとして有る」ということでなければならないことになるであろう

だが、物体は、その本性において、どうして「有らぬもの」なのであろうか

山や岩やがっしりとして固い全大地の基礎をなす素材が、どうして「有らぬもの」なのであろうか

すべて反撥するものや打撃を加えられるものは、その打撃によって自分たちのウーシア(実在性)を認めるよう強制するものなのである(『ソピステス』246a)

そこで、もし人が、次のように言うとすれば、(答えはあるのか)すなわち、「圧迫もしなければ強制もせず、まえもしないものが、すなわち、魂や知性が有るものであり、しかも、ほんとうに有るものであるのは、どうしてなのであろうか」と

それに、物体のばあいでも動かされやすくて軽いものは、それだけ静止している土よりも「有ること」の度合いが大きく、上方の元素の方が土よりも「より多く有る」のだろうか

そしてまことに、火にいたっては、すでに物体としてのあり方から逃れているので、(最も実在性の高いものなの)であろうか

しかし、思うに、それ自身で満ち足りているものは、その満足の程度が大きければ大きいほど他に迷惑をかけることが少なく、他を苦しめることも少ないが、

より重くて土から成る度合いも大きいものは、完全さの欠落と落下傾向の大きさと自己を上昇させることの無能さの程度に応じて、無力ゆえの落下の時に、その下降勢と鈍重さのゆえに衝突を引き起こすのである

だが、これに対して、生命を持ち、「有」にあずかっている物体は、それの「有」にあずかる程度に応じて、多くの快さを周囲にもたらすのである

それゆえ、屍にすぎぬ物体は、衝突に際してそれだけ大きな不快をもたらし、その衝撃の激しさは損傷をもたらすことにもなるのである

なお、動は、実は、物体に宿る生命のようなものだったのである

すなわち、その動は生命の模像を保持しているのであるから、物体性の少ないものほど強力な動を持っていることになるのであって、それは有の不足が<「有」を見捨てているもの>を、その見捨てている程度に応じて、それだけ物体性の強いものとするのに似ているのである

さらに人は、「受動の状態と言われているものから、さらに明確に知ることができるであろう

すなわち、物体性の高いものほど外的な作用の影響を受けやすいものであって、土は他の諸元素よりも外的な影響を受けやすく、他の諸元素はそれぞれ同程度の影響を受けるのである

なぜなら、他の諸元素は分割されても、何も妨げるものがなければ、再び集まって一つとなるが、土から成っているものはすべて、切り離されてしまうと、それぞれの部分がいつまでも別々になったままだからである

これと同じように、物体性のきわめて高いものは、極端に「有らぬもの」へとはいりこんでいるので、自己自身をもとの一つへともどす力が弱まっているのである

すなわち、その本性において弱体化しているものは、ほんの少しでも衝撃を受けると、その影響をもろに受けて崩壊してしまうが、

それゆえ、重く激しい衝撃は一一むろん、物体相互の、ではあるが一一破滅をもたらすことになるのである

そして、弱い物体が弱い物体に落下衝突する時には、衝突相手の弱い物体に強力な作用を及ぼすのであり、有らぬものは有らぬものに強力な作用を及ぼすのである

さて、かくして、押したり突いたりすることを証拠として「有るもの」を物体の領域に配置し、感覚を通して現れるパンタスマ(幻影)に真実の保証を得ている人びとに対して、以上のことが言われたのであるが、

彼らは夢を見ている人びとと一一その人たちは、自分の見ていることが夢のなかのことであるのに、実際に行われている活動だと考えているのであるが一一同じようなことをしているのである

なぜなら、事実、感覚のなすことは、眠っている魂のなすことだからである

それで、魂のほんとうの目覚めとは、ほんとうに肉体から出て起き上がることであり、肉体を伴って起き上がることはないのである

つまり、魂の肉体に内在する部分は、すべて眠っているのである

これに対して、ほんとうに起き上がることは、肉体から完全に離れておき上がることであり、

なぜなら、肉体を伴って起き上がることは、一つの眠りから別の眠りへの移行にすぎず、それはたとえば、一つの寝床から別の寝床へ移るようなものだからである

肉体は魂とは反対の種族に属するおのであるから、そのあり方において魂とは相反するものを持っているのである

7 しかしわれわれは、基体をなしている素材と、その素材の上にあると言われるもの(影としてある形相)へともどっていかなければならない

肉体の生成、流転、消滅など、「有るもの」の本性に属さないのも、これの証拠となるであろう

それらを吟味することによって、素材が非有であることや、素材が受動から自由(非受動)であることが知られるであろう

素材は有るものを欠いている

さて、物体は<より後なるもの>であり、<合成されたもの>であって、素材が他のものと一緒になって物体を作るのであるから、その素材は非物体的なものの部類に属することになる

すなわち、このような意味では「有るもの」も素材も、それぞれが物体とは異なるのであるから、素材は「非物体的なもの」という点で名称を同じくするのである

しかし素材は、魂でも知性でも生命でも形相でもないし、またロゴス(形成原理)でもなければペラス(限度)でもなく——なぜなら、素材は<限度のなさ>なのであるから——それに、力でもないのである

なぜなら、素材が何を作るのであろうか。つまり素材は、それらのいずれにも該当しないのであるから、「有るもの」という名称を受けるのもふさわしくなく、「有らぬもの」と呼ばれるなら、当を得ていることになるのである

そしてそのばあいの「有らぬもの」とは、動が非有であるとか、静が非有であるというような意味での「有らぬもの」ではなくて、ほんとうの意味での「有らぬもの」なのである

つまり素材は嵩の影であり幻であって、存立への希求なのである

またそれは、確固不動のものとしてではないけれども静止しているのであり、それ自体では見えないもの、見んと欲するものを避けるものでもあって、

人が見ない時には現れるけれども、注意して見ても、見えないものなのである

そしてそれは、いつもそれ自体で背反する現れ方をしているものであり、小にして大、少にして多、不足にして過剰なのであって、とどまることもなければ逆に逃げることもできない影なのである

何故、擬人化するのか?何をもって公言するというのか?

無力なものなのに、なぜ公言したり、何かが生じているように見えるのか

つまりそれは、知性からの力を受け取っておらず、「有るもの」をまったく欠いているのであるから、逃げることさえもできない無力なものなのである

それゆえ、素材がどんなことを公言しようと、それはみな偽りなのである

素材はたとえ大きなものとして現れようと小さく、より多くのものとして現れようとより少ないのであり、それは「有」を持っているように見えても、その「有」は「有」ではないのであって、いわば<逃げ回る玩具>のようなものなのである

したがって、素材のなかに生じているように見えるものも、ごまかしの玩具であり、影のなかの影にほかならず、ちょうど鏡のなかのように、或るところに座を占めているものが、別のところに現れているのである

そして「なかにはいってきたり、そこから出ていったりするものは、有るものの模像(『ティマイオス』50c4)」であり、<形のない影>へとはいりこんだ影、すなわち、素材の形のなさゆえに見られるものとなっている影であって、

その影は、素材に作用を及ぼしているように見えるけれども、実際には、何の作用も及ぼしていないのである

この影とは何か?

なぜなら、素材のなかにはいってくる影は、無力で弱く、抵抗する力を持ってはいないからである

しかし、素材の方も抵抗する力を持っていないのだから、影は素材を切断することなく通るのであって、それは水を通るのに似ているのであるが、あるいは人が空虚と呼ばれているもののなかに、いわば形姿を送り込むのに似ているとも言えるであろう

だが、実際には、<素材に影を映しだすもの>と<素材内に見える影>とは異なったものなのであって、これらの事実からしても、人は、素材のもつ受動の状態が偽りであるのを知ることができるであろう

それにまた、もし素材内に見られる影が、<そこから素材へとやってきた影の源>に似ているのであれば、おそらく人は、「影を素材に送りこんだものの何らかの力が素材に達している」と考えて、その力を影に与え、「素材は影によって作用を受ける」と考えたであろう

かくして、素材に映る影は弱く、偽りなのであるから、すなわち、夢や水や鏡などに現れる影のように、偽りのなかに落ちこんでいるのであるから、どうしても「素材は非受動的である」ことを許さざるをえないことになるのである

常に受動的である、と限定することはできない、とはどのようなことか?

有らぬもの、であるから受動性という性質すら持っていない、ということ?

なぜなら、素材内に見えるものは偽りのものであり、これを作ったものとはいかなる点においても類似性を持ってはいないからである

もっとも、いまのべた諸例では、見える影と、その影を見ているものとは類似性があるのであるが…

8 なお、全般的には、次のように言えるであろう

すなわち、作用を受けるものは、<そのなかにはいってきて、それに受動を作りにむもの>とは、力においても質においても相反しているようなものでなければならないのである(アリストテレス『生成消滅論』I 7,323b6)

なぜなら、ものに内在している暖かさには、これを冷やすものに基づくアロイオーシス(質的変化)があり、ものに内在する湿り気には、これを乾かすものに基づく質的変化があるのであって、

基体が暖かいものから冷たいものになったり、乾いたものから湿ったものになったりする時に、われわれは、「その基体が質的な変化を受けた」と言うからである

それに、他の元素への変化が起こった時に、「火が消滅した」と言われるが、この現象も、一つの証拠となるのである

なぜなら、われわれは「火が消滅した」とは言うけれども、「素材が消滅した」とは言わないからである

つまり、消滅にかかわりのあるものには、受動もかかわりがあるのである

なぜなら、受動を許容することは、消滅への道につながるからである

すなわち、受動的なものには、消滅もあるのである

プラトンがそこで「場(コーラー: χώρα)」としてのべているものが、プロティノスの言う「素材」に相当する

では、素材は自己自身のなかに、暖かさや冷たさや数えきれない程の質を、いや、事実、無限の質を取り入れて、それらの質によって分割され、それらの質を、いわば互いに密接に関連しあっているもの、混じり合っているものとして、所有しているけれども

だが、素材は消滅えないのである。というのも、素材は何へと、そしてどのようにして、消滅していくのであろうか(『ティマイオス』52a8)

——というのは、それらの質は、素材のなかでそれぞれが別々に離れているのではないからであるが——

素材自体は、互いに混じり合って作用を受けあっているそれらの質の真中でとらえられながら、どうして、その素材そのものも、それらの質と一緒に影響を受けないことがあろうか

もし人が素材をそれらの質のまったく外においておくのであれば、話は別かもしれない

だが、基体のなかにあるものはすべて、それ自体から基体に何らかのものを与えるという仕方で、その基体のなかに現在しているものなのである

9 かくてわれわれは、まず、次のことを理解しなければならない

すなわち、「或るものが別の或るものにそなわっている」ばあいのそなわり方や、「或るものが別の或るもののなかにある」ばあいのあり方は、一つしかないのではなくて、

一つには「或るものが別の或るものにそなわることによって、それを変えながら、劣ったものにしたり善いものにしたりする」ようなそなわり方があり、

たとえば物体のばあいや、少なくとも、生きものののばあいに見られるそなわり方があるが、

別に、魂のばあいに述べられたように、「善いものにしたり、劣ったものにしたりするけれども、あのもの(魂)は受動することはない」というそなわり方もあるし、

他方、たとえば人が蜜蝋のに形をつけるばあいのようなそなわり方もあるのであって、このばあいには、

「形が現に蜜蝋の上にあっても、そこに蜜蝋を別の或るものにしてしまうような影響があるわけではなく、また形が去ってしまっても、蜜蝋には何の欠損もない」のである

素材は他から影響を受けない

それに、むろん、光りは照らされているものの形を変えることさえもしないのである

それに、石は冷たくなっても石であるのに、その冷たさから、いったい何を得るのであろうか

線は色からどんな影響を受けるのであろうか。思うに、面のばあいだって、何の影響も受けないであろう

しかし、基体となっている物体は、おそらく影響を受けるのではないだろうか

だが、その物体が、色からどんな影響を受けるのであろうか

というのも、人は、「そなわること」や「形を表面に置くこと」を「影響を受ける」ということばで表現してはならないからである

それで、もし人が、「鏡や一般に透明なものは、そのなかに見える影によっては何の影響も受けることはない」と言うならば、彼はその例を、似つかわしくないものとして引用していることにはならないだろう

かくて、たしかに、素材のなかには暖かさや冷たさは生じるけれども、素材を暖かくしたりすることはないのである

なぜなら、素材のなかにあるものも影であり、しかも素材は、鏡よりははるかに影響を受けないものであるからである

暖かくするとか、冷たくするとかということは、質が基体を一方の状態から他方の状態に導くばあいのことだからである

[しかしわれわれは、冷たさについて、それはとにかく(暖かさの)不在、つまり欠如ではないのかどうかを考察する必要があるであろう]

そして、諸性質は一緒になって素材のなかにはいってくると、その多くが、いや、むしろ、そのなかの互いに相反している性質が相互に作用を及ぼすのである

というのも、香りのよさが味のよさに、色が形に、要するに或る種類に属するものが別の種類に属するものに、どんな作用を及ぼしうるのであろうか

右の事実からして、人はとりわけ、「或るものが別のものにそなわるばあいでも別のものに内在するばあいでも、その或るものがそなわることによって害を与えることはないという条件のもとで、その或るものが別のものと同一の場を占めることや別のものに内在することは可能である」ということを確信するにいたるであろう

それゆえ、ものがでたらめにどんなものによってでも害を受けるわけではないように、変えられたり受動したりするものも、どんなものによっても影響を受けるわけではないのである

その影響は、相反するものの、相反するものによる影響であり、それ以外のものがたがいに他のものから変容を受けることはないのである。だから、相反するもののないものが、相反するものによって影響を受けることは、むろん、ないのである

してみると、もし或るものが影響を受けるのであれば、その或るものは素材ではなくて、合成されたものであるか、あるいは単一ではあっても、多くのものが一緒になっているものであるかでなければならないことになる

だが、これに対して、単独に他から孤立していて(『ピレボス』63b7)いかなる点においても単一なものは、いかなるものの影響も受けずに、

互いに作用しあうあらゆるものの真ん中に孤立してとどまっているのである。

それはたとえてみれば、同じ家のなかで、人びとが互いに打ち消しあっていても、その家や家のなかにある空気は影響を受けないのに似ているといえよう

それで、素材を基体としてその上に集まっているものは、互いにその本性にしたがって行うべきことを行っているのであるが、

素材それ自体はこの影響を受けずに、それも、「素材のなかにある諸性質は、相反するおのであるが故に、互いに影響を受けることはない」という、その程度よりも、はるかに影響を受けることはない、と考えねばならないのである

10 さらに、もし素材が他からの作用の影響を受けるのであれば、その作用の影響そのものをであろうと、その影響の素材への到達以前の状態とは異なった状態となることであろうと、とにかく素材は、他からの作用によって受ける影響から、或るものを得るのでなければならない

素材は変容を受けるか

それゆえ、もし或る質が素材に影響を与えたとで、別の質がやってくるとすると、その質を受け取るものはもはや素材ではなくて、質を与えられた素材であることになるであろう

そして、もしこの質がまた自らの作用によって或るものを残して去っていくならば、その基体は素材とは別のものとなり、いろいろなものに変わって、いろいろな姿をとることになるであろう

その結果、もはや「すべてを受けいれるもの」ではなくなり、自分のなかにはいってくる多くのものの妨げとなって、もはや素材は存続しているのではないことになるだろう

それゆえ、素材は不滅なものでもないことになるであろう

だから、もし素材がなければならないとすれば、それは常に初めの状態と同一の状態を保っているのでなければならないのである

したがって、それを素材として維持していこうとする人びとであれば、「素材は変容を受ける」などと言うことはできないはずである

さらに、もし一般的に言って、「変容を受けるものはすべて、同一の形を維持しながら変容を受けるのでなければならず、その変容は、付帯的なものであって、本質的なものであってはならない」とすれば、

すなわち、もし「変容を受けるものは、(本質的には同一の形のものとして)とどまっていなければならず、それのとどまっている部分は、外的な作用を受ける部分ではない」とすれば、次の二つのうちのいずれかが帰結するのでなければならないことになる

すなわち、「素材は変容を受ける。だから、素材は自己自身から逸脱することになる」のか、

それとも、「素材は自己自身から逸脱することはない。だから、素材は変容を受けることはない」のかのいずれかでなければならないことになるわけである

だが、これに対して、もし人が、「素材が変容を受けないのは、あくまでもそれが素材である限りにおいてである。」と言うのであれば、彼はまず、「素材は、どの点では変容を受けることになるのかを言うことはできないであろうし、

彼は、たとえそのように反論しても、結局は、「素材それ自体は、変容を受けない」ことに同意することになるであろう

つまり、(素材とは)別の形相としてあるものも、その本質は形相にあるのであるから、その本質の面で変容を受けることは不可能なのであるが、これと同じように、素材にとって「ある」ということは、「まさに素材としてある」ということなのである

だから、素材は、素材である限り、変容を受けることはできず、あるがままの状態を保ちながらとどまっていなければならないのである

すなわち、形相のばあいは、形相それ自体は変容を受けないのであるが、同様にこのばあいにも、素材それ自体は変容を受けないのである

11 だからこそプラトンも、このような考えにもとづいて、「そこへはいってきたり、そこから出ていったりするものは、有るものの模像である(『ティマイオス』50c4)」と述べているのであって、まことにこのとおりであると思うのであるが、

彼はその際、何の理由もなしに、「はいっている」とか「出ていく」とかいうことばを使っているのではなくて、われわれが「分取の方法」に注意をはらって、これを理解するようにとのことから、そのような言い回しをしているのである

分取の方法とは何か?分有か

分有の問題である

そして、その「素材はどのような仕方で、形相を分取するのか」という、よく知られた難題は、まさに、多くの先人たちの考えた問題に、すなわち、「形相は、どのようにして素材のなかにはいっていくのか」という問題にではなくて、むしろ、「形相は、どのような仕方で素材のなかにあるのか」という問題に置き換えられるであろう

プロティノスは、当然ながら、人間キリストのなかの神の形相を意識においているのだと思われる

というのも、「それらの形相が素材のもとにあるのに、しかも、素材のなかにはいってきているそれらの形相が相互に作用を受けあっているのに、素材はどうしてそれらの形相の作用を受けずに、なおも同一の状態を保ってとどまっているのか」、これはまことに驚くべきことであると思われるからである

しかしながら、われわれは、「素材のなかにはいってきた形相が、そのつど、以前にはいってきた形相を押し出す」ということや、「合成されたものに受動がある」ということや、もし、「合成されたものであれば、どこにはいってきたりそこから出ていったりする形相を必要としているものにのみ、

すなわち、或る形相がそなわっていなければ仕組みのうえで欠陥のあるものとなるが、その形相がそなわっていれば完全なものとなるようなものにのみ影響がある」ということに、注目しなければならないのである

そして素材は、何がやってこようと、その仕組みに何ら得るところはないのである

なぜなら、素材は、或るものがやってきた時に、<まさに素材としてあるところのもの>となるのでもなければ、或るものが去ってしまっても、それだけ小さなものとなるのでもないからである

つまり素材は、初めの状態を保っているのである

人間キリストに神が入ることによって、完全となり、そしてその人間キリストが受肉して神に変容した、という流れに容易に展開できる

だが、飾りや秩序を欠いているものには飾りつけが必要なのであって、そのばあいの飾りつけは、われわれが人に衣裳を着せるばあいのように、変容を伴わずに行われることも可能である

しかし、もし人がその飾りや秩序と一体をなしているほどに美しく飾りつけられたばあいには、以前に醜かった部分は変容を受け、飾りつけられたものとして以前とは別のものとなり、かくして、醜さから脱して美しきものとなるのでなければならない

だが、もし素材が、「醜きものである」という意味で醜いのであれば、それは飾りにあずかることもできなかったであろうし、また、もし「悪そのものである」という意味で悪しきものであったら、善きものにあずかることもできなかったであろう

それゆえ、もし素材は醜いものであるのに美しくなったとすると、その「醜いものとなる」という点では、もはや以前にあったものとは同じではないのであろう

したがって、このようにして飾りつけられるばあいには、素材は「素材であること」をやめてしまうのであり、もし素材が付帯的に醜いのでなければ、とりわけそうなのである

したがって、分取は、人びとの考えているように影響を受けながら行われるのではなくて(影響を受けているのは)別の仕方で行われているような方法で行われるのである

おそらく、この方法によれば、<形相の分取による、素材の以前の状態の喪失>を伴うことなしに、「素材は劣悪なものであるにもかかわらず、善きものを欲することができる」。それはどうやって分取されるのかという困難な問題を解決することができるであろう

なぜなら、もし「分取」と言われているものがこの方法で行われ、その結果、われわれの主張しているように、「素材は、同一の状態にとどまり、変容を受けることなく、常にまさにそれであるところのものとしてある」のであれば、「素材は劣悪なものであるのに、どのように分取するのか」という問題は、もはや驚くべき問題ではないことになるからである

つまり素材は、自己自身から逸脱することはないのであるが、しかし、どうしても(形相を)分取しなければならないので、とにかく(素材として)有る限りはこれを分取するのであるが、しかしそのばあい、自らの本性を失わない仕方で分取するのである

だから、与えるもの(形相)によって「素材としてある」ことを損なわれることはないのであるし、それゆえにまた、あいもかわらず劣悪なものとしてあることにもなるのである

なぜなら、素材は、常に<まさに素材であるところのもの>としてとどまっているからである

したがって、もし人が、素材を「劣悪なもの」と言うばあいに、「素材は善きものによって影響されるものではない」という意味をこめて言っているのであれば、彼のことばは、真実を言い当てていることになるであろう

なぜなら、もし素材がほんとうに<善きもの>を分取し、その<善きもの>によってほんとうに変容をこうむるのであれば、その素材は、<その本性において劣悪なるもの>ではなかったことになるからである

だが、それは、「素材は完全に非受動的である(他の影響を受けない)」ということと同じなのである

12 プラトンも、素材について、右のような考えを持っていたのである(『ティマイオス』48e-53cに述べられている「第三の種族」が素材であるというプロティノスの考え)

素材は形姿からでさえ変容をこうむらない

「そのように考えていない」ことを示そうとして、すなわち、「どうして素材は、影響を受けないものとしてとどまりながら、諸々の形相を持ちうるのか」を示そうとして、<影響を受けない分取>の範例を探し求めたのである

そして分取については、「形相が基体のなかに生じてそれに形を与え、結果として、形相とその基体がいわば混じり合い、たがいに影響を受けながら、ともに変じて一つの合成されたものが生じる」とはみなさず、

——というのも、「(基体に)そなわりながら、基体の同一性をまったく損なわないものが、いったい何であるのか」をそのほかの方法で教え示すのは、容易ではないからである

かくしてプラトンは、「素材は(自らの上にある)形姿によって、素材を伴った諸物体に影響を与える」けれども、それ自身は、「それらの影響をこうむることはない」と想定することによって、素材のト・メノン(不変性)を示し、

——そして、自分のめざすものを得ようと懸命の努力をはらいながら、そうすることに、「感性界にはヒュポスタシス(真実在)の欠けていること」や「似像の占めるコーラー(場)の広大なること」を示そうとして、多くの困難な問題にであうことになったのである

われわれが、「素材それ自体は、それらの形姿からでさえ、影響をこうむりはしない」と推論できるようにしたのである

しかし素材は、形姿も大きさも持っていないのであるから、その素材に形姿がどのような仕方でそなわっているのかを示し、その形姿の(素材へ)となることを変容であると、どうして言えようか

すなわち、人はおそらく、次から次へと異なった形姿を受け取る素材を伴った諸物体のばあいには、「変容」は「形の変化」の同名異義語として用いたとしても、である

たとえ「変容」を「形の変化」の同名異義語として用いたとしても、である

それゆえ、もし人が、ここのことに関連して、「色は情意上のことであり、その他の事柄も情意上のことである(デモクリトス『断片』DK.,B9)」と言うのであれば、彼のそのことは、適切さを欠いたものとはいえないであろう

しかし、もし「素材は形相を形姿として持っている」という説も、われわれを満足させることがないとすれば、素材はどのような仕方で形相を持つのであろうか

なぜなら、万物の基体をなすものは、われわれが一般に考えているような(主観的な)あり方をしているのではないからである

しかし、(プラトンの)想定は、「素材は非受動的である」ということと、「素材のなかには、実際には存在していない影のようなものが、現に存在しているように見えるにすぎない」ということを、可能な限り明らかにしているのである

素材のもとにやってくるのは形姿である

われわれは、素材の非受動性について、まだ前以て話しておかねばならないことがある

なぜなら、「ことばの通常一般の用法によって『素材は作用を受ける』という説の方へ導かれるようなことがあってはならない」ということを教示しておかねばならないからである

たとえば、「同一の素材が火化され、液化される」と言うばあいには、それにつづくことばにも、すなわち、「空気や水の形姿を受けいれ」ということばにも注目しなければならないのである(『ティマイオス』51b4)

すなわち、プラトンは、「空気や水の形姿を受けいれ」ということばによって、「火化され、液化され」ということばの持つ(一般的な)意味を弱めるとともに、

「形姿を受けいれ」という表現で、「素材それ自体は形姿を与えられているのではなくて、形姿がいわば素材のなかにはいりこんだという意味であるのだ」ということを明らかにするとともに、

「『火化される』ということばは、厳密な意味で使われているのではなく、むしろ『火となって』という意味で使われているのだ」ということも明らかにしているのである

というのも、「火となる」ことと「火化される」ことは、同じではないからである

なぜなら、「火化される」ことは、他のものによってそうされることであり、そこには「作用を受ける」という意味も含まれているからである

だが、それ自体で火の部分であるものが、どのようにして火化されるのであろうか

というのも、もし人が、「(火の形姿が)素材にはいりこんでいる」と言い、そのうえさらに、「その素材が火化する」と言うのであれば、それは、いわば「彫像が青銅にくまなく及んでいる」(と言う)ようなものだからである

それに、素材のもとにやってくるものがロゴスであれば、それは、そのロゴスが、どのようにして素材を火化するのであろうか

では、もし素材のもとにやってくるものが、形姿だったら、どうなるのであろうか

だが、火化されるものは、すでに(形姿と素材の)両者を、その火化の原因としているのである

それでは、もしその両者から一つのものが生じるのであれば、どうしてその両者は、一つのものを生じるための要因となることができようか

いや、たとえその両者から一つのものが生じるとしても、両者が互いに作用を受けるのではなくて、両者が他のものに対してともに作用を及ぼすことによって(一つのものが)生じるのである

すると、はたして、その両者のそれぞれがともに作用を及ぼす時に、他のものが生じることになるのであろうか

いや、一方のもの(形相)が他方のもの(素材)の逃亡を妨げる時に、他のものが生じるのである

逃亡を妨げる、とは、形相が素材を限定するという意味

しかし、物体が分割される時に、どうして素材も分割されないことがあろうか

それに、その物体が分割されることによって、(分割という)作用を受けているのであれば、どうしてそれを受けて同じ作用の影響を受けていないことがあろうか

これと同じ論法によって、「物体が滅びるのに、どうして素材は滅びないことがあろうか」と問い、「素材も滅びる」としたとしても、何の不都合があろうか

われわれは、なお、次のように言わねばならない。すなわち「物体はこれこれしかじかのものであり、大きさである。しかし、大きさのないものには、大きさの影響が生じることもないし、また、事実、一般に物体でないものには、物体の影響が生じることもない」と

もし、このとおりであれば、素材を受動的なものとする人人は、「素材が物体であること」にも同意しなければならなくなってしまうだろう

12 なお、しかし、あの問題にも、すなわち「素材は形相から逃れる」ということばを彼らがどのような意味で使っているのかという問題にも、彼らは注意を向ける必要がある

では素材はどのような意味で、石や岩から

——それらは素材を内に含み持つものであるが——

逃れるのであろうか

というのも、まことに、彼らの主張のとおりであるとすれば、「素材は時には逃れることもある」が、時には逃れないこともある」ことにはならないはずだからである

なぜなら、もし素材が自らの意志によって逃れるのであれば、なぜ、いつも逃れないのであろうか

だが、これに対して、もし必然に基づいてとどまるのであれば、素材が何らかの形相のなかにない時はないことになる

しかし、それぞれの素材は常に同じ形相を持つとは限らないが、その理由を調べなければならない

そしてその理由は、むしろ、素材のなかにはいってくる形相の方に求められるべきであろう

では、どのような意味で「逃れる」(『ティマイオス』49e2)と言われているのであろうか

素材は自己自身の本性に基づいて、常に逃れるのである

しかし、このことは、「素材は決して自己自身から逸脱することはないのだから、決して形相を持つことはないという、そのような仕方で形相を持つ」ということにほかならないのではなかろうか

もしそうでなければ、彼ら自身が口にしていることばを、すなわち「(素材は)あらゆる生成の受容者であり、乳母である(『ティマイオス』49a5)」ということばを、いかに扱うべきであるのか、その術を知らないことになるであろう

それに、「受容者」ということばも、さらに「乳母」ということばも、ともに素材が非受動的な立場を維持していることを示しており、

というのも、もし「素材は受容者であり、乳母であって、生成は素材とは別で、変容を受けるものはその生成の領域にある」とすれば、素材は生成以前のものであり、したがって、また変容以前のものでもあることになるからである

また「それぞれのものがそのなかにはいってきて現れ、そして再びそこから抜け出していくところのもの」とか、「(素材は)場であり、座である(『ティマイオス』52a8-b1)」ということばについても、同じことが言えるであろう

プラトンの素材は、場であり座である、という言説

プロティノスはこれを再解釈する

プラトンが素材は、受容者であり、乳母であると述

それに、形相の「場所(『ティマイオス』52b4)」という表現を用いて説明されていることばも、あのもの(形相がはいってきて現れるものとしての素材)の受動を説いているのではなくて、別の方式を求めてのことばなのである

では、その方式とはどんなものなのであろうか

まことに、素材の本性と言われているものは、有るもののいかなるものでもなく、有るものの持つ「ウーシア(有)」から完全に逃れているのであって、それとはまったく異なっているのでなければならないのである

——なぜなら、有るものはロゴスであり、ほんとうの意味で有るものだからである

——だから素材はこのちがいゆえに、自分だけの持つ自己保全のあり方を守っているのでなければならないことになる

——すなわち、素材は有るものを受けいれないものであるばかりでなく、もし有るものの模像のようなものがあるとすれば、それにあずかってそれと親しい関係を持つようになってはいけないのである

というのも、そのようなものであればこそ、素材は有るものとはまったく異なったものでありうるからである

もしそうではなくて、或る種の形相を自分のなかに取りいれて、それと一緒になるのであれば、素材は(自分とは)別のものとなって(形相と)異なるものであることをやめ、あらゆるものの場であることをやめて、いかなるものの受容者でもないことになるであろう

素材の上には何もない

しかし、そのようなことにはならないで、或るものが絶えず素材のなかにはいりこんだり素材から抜け出たりすることができるためには、たとえばはいりこんだり抜け出たりするものがあっても、素材は何の影響も受けずに同一のものとしてとどまっているのでなければならないのである

だから、まことに、素材のなかにはいっていくものは影としてはいっていくのであり、真ならざるものとして真ならざるものへはいっていくのである

すると、はたして、その影はほんとうにはいっていくのであろうか

偽りであるがゆえに真実にあずかることのまったく許されていないものに、「ほんとうにはいっていくこと」など、どうしてできようか

すると、はたして、偽りのものののなかにはいっていくこと自体が偽りで、たとえば鏡を見ると、そこに視覚対象の影が見え、しかもその影は、人がそれを見ている限り、いつまでも見えるが、素材のばあいに起こることも、この鏡のばあいと似ているのであろうか

そうである。事実、この感性界においては、もし君が有るものを取り除いてしまえば、いまこの感性界で見えているものは何ひとつとして、いついかなる時にも、決して現れなかったであろう

むろん、しかし、感性界の鏡は、それ自体がまた見えもするのであるが——なぜなら、鏡自体がまた或る種の形でもあるからである——しかし、素材のばあいには、決して形ではないのであるから、それ自体は見えないのである

なぜなら、もしそうでなければ、素材は形を受け取る以前に、それだけで見えたはずだからである

——いや、むしろ、空気はたとえ光りを受けた時でも見えないのであるが、素材はこの空気のような場内にあるのであるからなので、空気は光りを受けなくても見えないからである——

さて、かくして、鏡のなかに映っている影は去っても、その影の映っていた鏡は見えるのであるし、もとの鏡としてとどまっているのであるから、人は、鏡のなかに映っている影が実際にあるとは信じないであろうし、あるいは半信半疑であろう

しかし、鏡を満たしている影は存続することができて、しかも鏡そのものは見えなかったとしたら、われわれは、「鏡のなかに見えるものはほんものではないのではないか」と疑うことはしなかったであろう

——しかし、素材のばあいには、そのなかに影を持っていようといまいと、それ自体が見えないのである——

だが、もし鏡のなかには実際に何もなく、ただあるように見えるにすぎないのであれば、われわれは素材のばあいにも、次のように言わねばならない

そこで、もし鏡のなかに実際に或るものがあるのであれば、同様に素材のなかにも、実際に感性的なものがあるとしなければならない

すなわち、「素材のうえには(何もなく)ただあるように見えるにすぎない。そしてわれわれは『真に有るもの』の持つ『ヒュポスタシス(有)』をその仮象の原因としなければならないのであって、『真に有るもの』は常に真なる仕方でその『有』にあずかっているのであるが、『真に有るものではないもの』は、真ならざる仕方でその『有』にあずかっているのである

??

なぜなら、もし『真に有るもの』が真に有るのではなくて、『真に有るものではないもの』が真に有るのであったら、それら『真に有るものではないもの』は、『真に有るものではないもの』のあり方と同じあり方をとるのであってはならないからである」と

素材は作用を及ぼすものの影が映し出されるものである

14 では、どうだろうか。もし素材がなければ、何ものも有りえなかったのではなかろうか

たしかに、鏡やこれに類するものがなければ影像もありえなかったであろう

もともと他のもののなかに生ずることをその本性としているものは、それがなければ生じえないからである

というのも、この「他のもののなかに生じる」ということが影像の本性だからである

むろん、或るものが作用を及ぼすものから離れ去ったのであれば、その或るものは他のうちになくても、ありえたであろう

だが、その作用を及ぼすものは、とどまっているのであるから、その作用を及ぼすものの影が別のもののなかに映しだされるのであるとすると、その影の映しだされるものが別になければならないことになるのであって、

知性界にとどまっている形相があり、その影が素材に映しだされる

それは実際にはやってくることのないものに座席を提供するものであることになるのである

そして、座席を提供するものは、現にそこにあることと厚かましさと一種の乞食根性と貧しさのゆえに、いわば無理につかもうとし、つかむことができずに欺かれ、そのために常に貧しく、いつも物乞いをしているのである

つまり、素材はもともと強欲な盗人なのであるから、(プラトンのエロスの誕生にまつわる)物語は、素材がその本性において善きものを欠いたものであることを示すために、素材を物乞いする乞食女(ペニア)としているのである(『饗宴』203b)

なお、この乞食は、施しをする者の持っているものなら、これを要求するのではなくて、自分の得られるもので満足しているのである

したがって、この事実も、素材のなかに現れるもの(真に有るものとは)別のものであることを示しているのである

それにその名前(ペニア)は、素材が満たされざるものであることを示しているのである

単に富んでいることを現す神としてポロスを紹介していたのではないか?(エロスの誕生に関して)

他方、プラトンは「ポロスと交わること」が「真に有るものと交わること」でも「コロス(充足)と交わること」でもなく、「或る種の方策に富むものと交わること」であることを明らかにしているのである

だが、このことは、パンタスマ(見かけだけの姿)の持つソピアー(小利口)と交わることを意味しているのである

というのも、何らかの意味で「有るもの」の外で存在しているものが「有るもの」にまったくあずからないということは不可能であるが

——なぜなら、「有るものども」に作用を及ぼす」のが、「真に有るもの」の本性だからである——

しかし、いかなる意味においても「有るもの」ではないもので「有るもの」と交わることのないものが、(有るもの)にあずからないにもかかわらず、(有るもの)にあずかるのはどうしてなのであるか、

それは自らの本性からすれば、他といわば結合することの不可能なものでるにもかかわらず、あたかも近隣からのようにして或るものを得るのはどうしてなのであるか、これはまことに不思議なことだからである

それゆえ、素材の受け取ったものは、いわば滑らかで平らなところからこだまが滑り去るように、本性を異にするものから滑り去ることになる

すなわち、その素材に受け取られたものがその素材のもとにとどまらないので、その姿がそこにあるようにも見え、かつそこから去ているようにも見えるのである

しかし、もし素材が(有るもの)にあずかっているものであり、或る人の考えるような仕方で受け取っているものであったら、その素材のもとにやってきたものは、そのなかにのみ込まれ、そのなかへ沈んでしまったことであろう

だが、実際には、明らかに素材のもとにやってきたものは、そのなかにのみ込まれてしまうのではないのである

すなわち、素材は同一の状態を保ちながらいかなるものも受け取らず、むしろ、その接近・進行を阻止するのであって、押しもどす基地(すなわち座)としての役割をはたすとともに、同じところにやってきてそこで混じり合うものの「受容者」としての役割もはたしているのである

接近を阻止するとは何か?

有るものの影を映す、だけで混じり合うことはない、ということではなかったのか?

すなわち、素材はたとえてみると、人びとが火を得ようとして太陽に向けて据える磨かれた器のようなものなのであって

——人びとはその器の或るものに、水を満たして使用することもあるのであるが——

そのばあい、太陽の熱はその器の内にあるものの抵抗に妨げられて、そのなかを通り抜けることができず、その外側に集められ(火を発する)のである

それゆえ、素材はこのような意味で(万物の)生成の原因であり、素材のなかに集められるものは、右のような仕方で集められるのである

15 しかし、太陽からの火を自分のまわりに集める器のばあいには、感性的な火から発して自分のまわりで生ずる閃光を受け取るのであるから、それ自身もまた感性的なものの特性を持っているのである

だから、また明らかに、そこに集まる火は、その器の外、その器の次、その器の知覚にあり、その器に接触するのであって、そこには二つの限界(境目)があるのである

だが、これに対して、素材の上に集まるロゴスは、これとはちがった意味で、素材の外側にあるのである

というのも、このばあいの(ロゴスと素材)本性のちがいは、両者の間に対をなす限界を必要とせず、十分だからである

いや、この両者の本性のちがいは、いかなる限界ともまったく無縁なのである

なぜなら、その本質のちがいと全く同族関係にないという点で、混じり合わないものを持っているからである

逆に言えば、ロゴスは混じり合うものも持っている。魂はロゴスを含むのであるから、素材と混じり合うことができる

そして、素材がそれ自体で(同一の状態に)とどまっていることの理由はこれ、すなわち、「素材のなかにはいってくるものは、素材から何も得はしないし、素材もそのなかにはいってくるものから何も得はしない」ということにあるのである

それに、「外側にある」と言っても、形相が素材の上に位置を占めているからそう言われるのではなく、「形相がその上にあるところのもの」と言っても、それが視覚によって別ものとして識別されるわけでもなくて、ロゴス(理性)がそのように述べているのである

さて、先の例で見てみると、魂はもともと影ではないのであるが、表象は影なのであるから、たとえ多くのものが表象を魂を導くように見えるように見えても、それでもなお魂の方が、その表象を素材もしくはこれに相当するものとして用いているのであって、

事実、表象が魂からの活動によって追い払われることも稀ではないのであるから、その表象が自己のすべてをあげてやってきたとしても、魂は表象から覆い隠されることはないのであり、あるいは、そのことによって魂を完全に覆われたものとしたり、魂自体が何らかの表象像としてしまうようにしたりすることはないのである

——それは力の点では魂よりははるかに弱く、「真に有るもの」であろうと、逆に(素材に)ふさわしい「偽りの有るもの」であろうと、「有るもの」でも何ひとつとしてこれを所有してはいないのであるが——

16 そして、ある種のロゴスが素材へとやってきて、ロゴス自身の欲する広がりへと素材を導き、自分のほうから素材に大きさを授けて、素材を大きさのあるものとしたのであるが、しかし素材はそれ自体では大きさのあるものではないし、また大きさを授けられることによって大きくなるのでもないのである

表象には形相だけではなく、ロゴスもやってくる

いや、魂のなかにある思わくやパンタシアー(表象)は、魂と混じり合っているのではなくて、魂と混じり合わなかったから、魂から何も取りあげることもしなければ、魂のなかに何かを置きざりにすることもせずに、それぞれがそれのみで純粋さを保ちながら再び魂から去っていくのであるが、素材のばあいもこれに似ているのである

表象は影である

表象を追い出すこともある

魂のなかに表象がはいっている

魂は表象に対抗する働きとロゴスを持っている

なぜなら、魂は自分のなかに対抗する働きとロゴスを持っていて、それによって、自分に近づくものを追い払ってしまうからである

だが、これに対して、素材の方は

すべてを欠いているので自分を守りぬくいかなる手段も持ってはいないのであるが、しかし、ほかのものが姿を現す時には、その要因となるのである

だが、素材そのものは、「私はここにある」と言表することさえもできないのであって、或る種のロゴスが奥深くにはいりこんで「有るもの」から素材を区別して見つけだし、

「してみると、素材というものは、あらゆるもののなかに引っぱり込まれて、これにしたがったり、逆にしたがわなかったりするように見えるけれども、要するに、<有るもの>すべても下位のもの>すなわち<有ると思われていたもの>からさえも見捨てられているのだ」ということを知るのである

素材は大きさという性質は持たない

というのも、素材の上にある「大」は、大きさだったことになるからである。それゆえ、もし人がこの形相を取り除いてしまえば、その基にあるものはもはや大きくもないのでも大きく見えるのでもないのであって、

もし大きくなったものが「人間」や「馬」であったら、そして「馬」と一緒に「馬のおおきさ」が素材へやってきたのであったら、「馬」が去れば、「馬の大きさ」も去ることになるのである

してみると、素材は形姿からも何も得ていないことになるであろう

素材は実際にこの宇宙万有ほどの大きさにあっているように見えるけれども、もしこの宇宙とそれに内在するすべてのものが終焉を迎えれば、

それらすべてとともに、すべての大きさもその他の性質も、同時に素材から去ってしまうことは明らかであるし、

もしそうでなければ、素材は、火から他の或るものとはならず、に、火としてとどまっていながら、しかも、火ならざるものとなるであろう

また素材は、<以前に素材にかかわって、これにも似た仕方で素材を限定していたもの>を何ひとつ保持せずに、<まさにその点において素材であったところのもの>として、残されることにもなるのであろう

だが、いかなる影響も受けないもののばあいには、もはや残っているものは何もないのであって、たとえば、光りが空気にかかわっていて、そこから去った時、その空気のばあいに似ているのである

むろん、或るものがそなわることによって影響を受けるもののばあいには、その或るものが去ってしまっても、それを受け取っていたもののなかに、なお何かが残っているものなのである

しかし、もし人が「大きさを持たないものが、どうして大きくなるのだろうか」と不思議に思うのであれば、「だが、暖かさを持たないものが、どうして暖かくなるのであろうか」

つまり、形姿が素材のないものであるように、大きさも素材のないものであるならば、素材にとっては、「有ること」と「大きくあること」とは同じではないのである

それに、もしわれわれが素材を維持していこうとすれば、「素材は(形相を)分取することによって、あらゆるものとなる」

だが、大きさもまた、このあらゆるものの一つなのである

だから、大きさも、他の限定的な諸要素とともに

——ただし、それらの要素から分離されているのではないが——

合成された物体のなかにあるのである

なぜなら、事実、大きさも物体のロゴス(定義)のなかに含まれているからである

だが、素材のなかには、この分離されていない大きさささえも、含まれていないのである。なぜなら、素材は物体ではないからである

17 素材は大きさそのものでもない

17 だがさらに、素材は大きさそのものでもないのであろう

なぜなら、大きさは形相であって、他を受けいれることのできるものではないからである

それにまた大きさは、それ自体であるものなのであって、ある限定された意味での大きさではないのである

しかし、大きさは、知性もしくは魂のなかに位置を占めているものではあるけれども、「大きくあること」を欲して、<大きさへの欲求もしくはそれへの動によって、それをいわば模倣せんと欲するものども>に、それらのものの性状を他のもの(としての素材)のなかにはいりこむことを許したのである

だから、「大」は像を映しだす行程を走りながら、素材の「小」を自分とともに、まさにこの「大そのもの」へと走らせ、かくして、その「小」を広がりでもって、大きくあるように見えるようにしたのであって、実際には、それは中身のないものなのである

つまり、素材の「大」はあの大に向かって広がっている大であることは不可能なのであるから、拡張によって広がりを与えられても、それは偽りの大にすぎないのである

すなわち、有るものはすべて、自分とは別の一つもしくはそれ以上のものに自分の影像を作りだすのであるから、その影像を作りだすもののそれぞれがそれ自体で大であれば、それに応じて、その全体も大であることになるのである

だから、たとえば馬の「大」とか何かほかのものの「大」というような、それぞれのロゴス(形成原理)の特定の大は、集まって(ともに作用をしているのであり、大そのものものなのである

素材が大と見えるのは大の投影作用によるに過ぎない

すなわち、素材全体が「大そのもの」に照らされることによって大となったのであるが、その素材の各部分も、個別的な大となったのであるが、その素材の各部分も、個別的な大となったのである

すなわち、「大」の属する全体としての形相と個別的な形相から、あらゆる大が同時に現れたのである

そしてその大は、全体としての形相にもあらゆる個別的な形相にも、いわば広がっているのでい、その大は、形相の力が<それ自体ではいかなるものでもないものをあらゆるものとして>あらしめる限り、形相のなかにも嵩のなかにもあることを余儀なくされたのである

すなわち、それは「(色彩や性質が)現れる」という、まさにそれと似ているのであって、<色彩ならざるもの>から生じた色彩も、<性質ならざるもの>から生じた感性界の性質も、それの源をなす知性界の形相と同じ名前を持っているのであり、

同じように感性界の大きさも、<大きさならざるもの>もしくは<(実質は異なるが)同じ名前のもの>から生じたものなのであって、素材内の諸形相は、素材そのものと形相そのものの中間に観られるものなのである

そして、むろん、それら素材内の諸形相は、あの知性界の諸形相に由来するものであるから、われわれの目にあらわになるのであるが、しかし、その現れるの宿るところのものは、実際には<有るもの>ではないのであるから、その現れは偽りなのである

そして(感性界の)個別的な事物は、<素材内に見られ、自分自身の場としての諸形相>の力に引き伸ばされて、大きさを与えられているのであるが、それらは無理に引き伸ばされて、あらゆる事物となっているわけではないのである

というのも、この世界は素材ゆえにあるからである。そして素材内の諸形相は、それぞれが自己の所有する力にしたがって引き伸ばすのであるが、それも素材内の諸形相は、その力をあの知性界から得るのである

かくして、まことに、素材を大とするものは——ただし、素材は大と見えるにすぎないのであるが——「大」の投影作用に由来するのであって、そこに映し出された影が、この感性界の大きさなのである

そしてそのばあいに、それの影が映しだされる素材は、どうしてもそれに歩調を合わせざるをえないのであって、自己のすべてをあげて、どこにおいても、それ(影)に身をまかせるのである

なぜなら、それはあくまでも素材であって、特定の或る大きさの素材ではなく、特定の或る大きさではないからである

そしてそれ自体で特定の或るものではないものは、また特定の他のものによって、反対のものにもなりうるのであり、反対のものになっても、特定の或るものではないのである

もしそうでなければ、素材は静止していることになったであろう

いつも「大」について論ずるのは何故か?

この世のものの性質という物質的なものでないに係らず、形相ではないことを説明する

18 それゆえ、「大」を直知する働きを持っている人は

<直知者の内にあるのでもなければ、「大」の>いかなる形相と痕跡も持っておらず、また他のいかなるものの形相も痕跡も持っていないもの>を把握することができるであろう

——もし仮に彼の直知する働きが、その働き自体のなかにとどまる能力を持つのみならず、その能力が外にも向けられるのであれば——

例えば大は素材がまとう衣服のような形相の影

では、その直知の働きは、自らの所有する能力によって何を作りだすのであろうか

その働きは、馬を作るのでもなければ、牛を作るのでもない。それらを作りだすのは、他のものなのである

だから、「自己自身が大としてある」という、「大」にありつく幸運に恵まれなかったものにとっては、自分の全諸部分において可能な限り大であるが如くに見えることだけが、残されることになるのである

「大」は<大いなる父>からくるのであるから、それとは別のものは、自分のなかに映しだされ影としての大は持つけれども、「大」を持つことはできないのである

素材の無限定にして永遠不変であることが、聖性を持つことにつながることを否定するために、素材を貶めるのであろうか?

素材は形相を受け入れるのであるから、形相に対して希望や欲求を持つ必要はない筈である

素材を卑しいものとする理由がないからである

だが、このことは、「(大を受け入れて)不足するところはない」ということや、「いろいろな仕方でいろいろな大きさに広がっている」ということを、そしてさらに、「自己自身のなかに同族同種の諸部分を持っている」ということや、「いかなる大きさからも取り残されることはない」ということを意味しているのである

つまり、大の影はあくまでも大の影なのであるから、小さな嵩のなかでなおも卑しい大きさを作りあげてありつづけることは不可能なのであるし、真の大への希望と欲求の強さに応じて、<自分と歩調を合わせているもの>と一緒に

——というのは、それが後に取り残されることは不可能だからであるが——

自分の可能な範囲内で進んで行き、<あの大を持っていなければ、持っていると思われもしないもの>を大となし、嵩において大と見えるようにしたのである

大という形相が人の目に映るときに、嵩、となるということか?

しかし、それにもかかわらず、素材はたとえその大を衣服のようにまとうように身にまとっても、なお自己自身の本性を維持しているのであって、大が走りながら素材を導いた時に、その大と歩調を合わせて走った素材が、それをまとったのである

なぜ、形相の影が走るのだろうか?

だが、その衣服を素材に着せたものがそれを素材から取り去ってしまうと、素材は再びそれ自身だけで単独にあった時と同じ状態を保つことになるか、あるいはその素材のなかに現存する(別の)形相がそれに与える大きさと同じ大きさを保つことになるのである

魂は形相を所有する

ここでいう魂は、宇宙魂?

嵩を取り去られたもの、とは何か?素材ということ?

形相である魂は不変であるので、何かを受け入れることはないのでは?

さて、魂は<真に有るものども>の形相を所有し、自己自身も形相なのである

すなわち、魂はすべての形相を一括して同時に所有しているのであって

——その際、個別的なものの形相も、それ自体で一つにあとまっているのであるが——

感性的なものの形がいわば自分の方へ向きを転じて近づいてくるのを見ると、それらの形を多様性と共に受けいれることには耐えられず、嵩を取り去られたものとして見るのである

というのも、魂は、<まさにそれであるところのもの>以外のものにはなりえないからである

だが、これに対して、素材の方は、いかなる抵抗力も持たない、というのも、素材は活動しないからであるが、その素材に働きかけるものが何を欲しようと、その働きかけを受けいれるべく待機しているのである

それゆえ、(1)あの世界のロゴス(形成原理=魂)からやってくるものは、まさに生じようとするものの痕跡(最下位の形相=種子的形相)をすでに持っているのである

なぜなら、たとえば影像の<パンタシアー(現れ)>に際して、ロゴスが動かされるばあいには、そのロゴスに由来する動が<分割>だからであって、もしその一つの同じものとしてとどまっていれば、むろん、それは動かされなかったわけで、そのばあいには、そのロゴスはあるがままにとどまっているのである

ロゴスは影ではないので、分割されて動き、素材のもとにやってこなければいけない?

それに、(2)素材は、魂のようにしてすべてを一括して自分のなかに宿すことはできないのである

もしそうでなければ、素材は知性的なもののひとつであることになったであろう

さらに、(3)素材はすべてを部分的なものとして受けいれるのではないけれども、とにかく受けいれるのでなければならないのである

してみると、素材はあらゆるものの「場」なのであるから、それ自体があらゆるものに及んでいて、あらゆるものと出会うのでなければならず、またあらゆる広がりに十分対応できるものでなければならないことになる

なぜなら、素材自体は広がりでもってとらえられるものではないけれども、自分の方に向かおうとしているものには、開かれているからである

では、或る一つの形相が素材のなかにはいってきた時に、その形相は互いに共存不可能な別の形相をどうして阻止しなかったのであろうか

素材のなかに最初のものとしてはいってきた形相などはなかったのである

もしあったとしても、それは宇宙の形相だったのである

したがって、そこではあらゆる形相が同時にあり、かつそれぞれの形相は部分的なものとしてあるのである

素材は分割される

なぜなら、生命あるもの(宇宙)の素材は、その生命あるものが部分に分かれているにしたがって、部分に分かれるからである

もしそうでなければ、ロゴス以外には何ものも生じなかったであろう

19 母のもとに向かうようにして素材のなかにはいった諸形相は、素材に害を与えるのでもなければ、逆に利益をもたらすのでもない

形相の与える衝撃は形相相互に向けられている

形相の与える衝撃は、素材に向けられているのではなくて、形相相互に向けられているのである

なぜなら、形相の力は相反するものに向けられているのであって、もし人が基体を<そのなかにはいりこんでいる形相を含むもの>として考察するのであれば、話は別であるけれども、そうでなければ、その力は基体に向けられているのではないからである

というのも、冷は熱を、そして白は黒をそれぞれ終息させるか、あるいは互いに混じり合ってその二つから別の性質を作りだすからのいずれかであるからである

それゆえ、作用を受けるものは征服されるものであり、それらにとって「作用を受ける」ということは、「以前にあったところのものとしてあるのではなくなる」ことなのである

——なお、<魂のあるもの>においては、受動は肉体に生ずるのであって、肉体に内在している諸性質や諸力の面で変容が生じるのである

そして、それらの仕組みが解体したり、新たに結合したり、自然の仕組みに反した改変などがあると、それらの影響は肉体には現れるけれども、

肉体と結びついている魂には、比較的激しい変動に関する認識があるにすぎず、もし偏動が激しくなければ、魂は、これを認識することさえもないのである

——だが、素材はもとの状態のままにとどまっているのである

なぜなら、冷が去り熱がやってきても、素材は何の影響も受けないからである

というのも、素材にとっては、冷も熱も親近なものでもなければ疎遠なものでもないからである

したがって、「受容者」とか「乳母」という表現(『ティマイオス』40a6)は、素材にとっては、より適切な表現であることになる

プラトンの言説が適切であることを示すために、再解釈を行って解決した

母という表現は例

だが、「母」という表現は、たんなるたとえとして用いられたにすぎない

なぜなら、素材は何も生みはしないからである

だが、おそらく、「母親も、生まれ出る子供たちとの関係では素材の立場にある」と主張する人たち(アリストテレス『動物発生論』IV 1,763b32)は、「彼女は(子種を)受け取るだけで、生まれ出る子供には何も与えはしない」と考えて、素材を「母」と呼んでいるのであろう

なぜなら、子供の肉体はそのすべてが栄養から生ずるからである

しかし、これに反して、もし母親が生まれ出る子供に何か与えるものがあるとすれば、それは彼女が素材であるからこそ与えるのではなくて、形相でもあるから与えるのである

なぜなら、形相のみが<生みうるもの>であって、それ以外のものは<不毛のもの>だからである

それゆえ、思うに、昔の賢者たちも秘儀のなかで、神秘的な口ぶりで謎めいたことばを用いながら、古き昔のヘルメス神を「すぐに機能を発揮する生殖の道具を常に所有している神」とすることによって

「知性界のロゴスが感性界の事物の産出者」であることを明らかにしているのであるが、

素材の不毛性

他方、彼らは、彼女(地母神)を取りまく去勢された男たちを通して、「常に同じ状態を保っている素材の不毛性」を明らかにしているのである

すなわち、彼らは素材を万物の母とした時、「この素材こそ基体としての働きをする原理である」と考えて、

そのように名付け、自分たちの欲するところを明らかにしようとして、この「万物の母」という名前を考えたのであるが、それは素材があらゆる点で母に似ていることを示そうとしたからではないのである

つまり彼らは、<どのような意味で(素材が母で)あるのか>をもっと正確に把握することを欲して、上辺だけの探求に終わっていまうことのない人びとに対して、

遠まわしにではあるが、できるだけはっきりと、「彼女に近づいているものは女性でもなければ生むこともできず、生む力を、すなわち男性としての立場を保持しているもののみの持つ力を完全に奪われたものである」という事実を用いることによって、

「素材は不毛であり、全き意味での女性ではなくて、(子種を)受け取る限りでは女性であるけれども、生むという点ではもはや女性ではない」ということを示したのである